

国宝・重要文化財の遺構にみる詰組斗拱の研究 —甲良家建仁寺流のみられる「アイタ」による斗拱法—

内田・須崎研究室 高野 遼真

研究概要

日本の伝統的な建築において、細部意匠やプロポーションが造形性を高める要因となっている。その基盤となった一つとして江戸時代の設計基準を記した木割書が考えられる。江戸時代の大棟梁職において、建仁寺流を形成した甲良家は多くの木割書を伝えた。その最大の特質は、詰組斗拱の斗拱芯々間隔を「アイタ」と称する一種のモジュールに置き換えていることであり、その比や倍数から合理的な設計を可能とした。

そこで本研究では、全国の国宝・重要文化財の寺院建築のうち、詰組斗拱を持つ遺構49件を対象に、アイタの普及具合や斗拱の配列についての研究、分類を行った。

研究目的

日本全国の詰組斗拱を持つ寺院より、その類型を明らかにしアイタ型の遺構の存在を確認する。また中世から近世にかけての木割の原理において、日本の古建築における比例関係を重視したシステムである「アイタ」がわが国にどの程度普及されたのかを明らかにする。

研究成果

- ・詰組斗拱の類型に地域性がみられた。
京都では一貫してソナエⅢ型のみを用いていた。発展型である枝割が用いられる型が出現してもそれまでの設計方法を崩さず、伝統を重んじていたと考えられる。
- ・新たにアイタ型に類別できる遺構が確認できた。
知恩院三門、南禅寺三門、専修寺如来堂の3件がアイタ型に該当する。(下図)また3件中2件は京都にあり、京都においてもアイタによる設計方法が存在していたといえる。
- ・「アイタ」は普及しなかった。
詰組斗拱全体の変遷として、中世はソナエⅠ・Ⅱ・Ⅲ型が主流で、近世に入ると枝割を用いた型が出現する。しかし「アイタ」は理想的な設計体系を確立させながらも、普及しただけではなかった。理由としては、技術的に複雑であることから容易に習得できるものではなかったのではないかと考えられる。

比例を重視したシステムである「アイタ」は日光東照宮や南禅寺三門などの寺院に用いられ、近世から現代まで多くの人々に好まれている。西洋におけるモデュロールや黄金比のように、比による日本独自の設計方法の1つとして大きな役割を果たしたといえる。



知恩院三門



南禅寺三門



専修寺如来堂

苦労した点や感想など

修理工事報告書の図面などから寸法値や比率を確認し、計算してどの型に当てはまるかを検討していくため、とても大変でした。また、わからない部材名が多かったり、アイタに関する研究も少なく、行き詰まることも多かったです。狭い範囲の研究であり、内容も一般的には馴染みのない部分であるため、発表の場などで自分の研究を人に伝えることが何より苦労しました。